

〈研究ノート〉

「イヤイヤ期」を呼び換えることで生じる学生の意識変化

鳥丸 佐知子

本論は、2018年5月12日に朝日新聞に掲載された記事をもとに、将来保育者を目指す学生に対して「イヤイヤ期」を別の言葉で言い換えることによって、この時期の子どもの印象や、この時期に対する認識が変化するか否かについて調査したものである。その結果、大半の学生がこの時期の子どものあり方を成長の証として捉え、ポジティブな呼び方に換えることで、望ましいものとして保護者にも伝え、保育者としても寄り添っていきたいと回答した。

キーワード：イヤイヤ期、自分、自我の芽生え、捉え方、前向き

1. はじめに

「何をするのにも嫌がる2歳前後の時期を指す『イヤイヤ期』、呼び方を変えませんか。

カウンセラーの永瀬春美さんは、2018年4月3日付の朝日新聞「声」の欄で、このような案を投稿した。その投稿がきっかけとなり、朝日新聞では同月21日付の朝刊で一般に向けて別名の公募を行なった。

その結果、20日間で500件近い投稿が届いた。朝日新聞ではその投稿をもとに「反響編」を2回に分けて特集し、記事として掲載した。投稿を寄せてくれたのは、育児に悩む親や祖父母世代、保育士などであったという。まさに、この時期に対する世間の関心の高さを示す出来事であったと言えるであろう。

「第1次反抗期」を通称「イヤイヤ期」と呼ぶようになったのはいつ頃からだろう。「第1次反抗期」と呼ばれる2～3歳の時期には、子どもの反抗や自己主張が急に増大する。そのため、子どもが親からの指示、提案に反抗や拒否を示したり、自分の主張をかたくなに貫こうとしたりするため、親子間の葛藤も増大すると言われていた。もっとも、この時期の子どもが示す反抗

や主張は、自分が何をするかは自分で選んで決めたい、自分がやりたいと思ったことは自分の力で成し遂げたいという、子どもなりの意志や意欲の表れであるのである^{1) 2)}。

筆者自身も担当する『発達心理学』の講義の中で、この時期の子どもの反抗は、一見理不尽に思えることも多いが、自主性や自律性の芽生えによるものであるから、その芽をつままないよう見守ることが大切であると話している。

しかしながら、この時期の子どもと関わる大人たちは、子どものわけがわからない（ように感じられる）かたくなな態度に、様々な場面で困ってしまい、まさに「イヤ」になってしまうことも多い。一方、子どもの方も（本当にわけがわからないことも含めて）「イヤ」を連呼する時期で、自らの思いと、思うようにならない現実とのほざまで葛藤する時期であるといえる。

この時期の母親としての発達課題に関して、氏家（1995）³⁾は以下のように述べている。

「母親としての発達課題は、たんに子どもの発達を保証したり促進したりすることができるような技能や能力を身につけることではないと

いってもよいであろう。むしろ、つぎつぎと変化する子どもという現実、その都度その都度うまく適応し、子どもの発達レベルや状態にあった対応をすることであると考えられる。」

この文章によれば、この時期テーマとなっていることは、子どもにうまく対応するための「技能」や「能力」を身につけることではない。むしろ、子どもに生じた変化に対する親（保育者）の反応、あるいは子どもの変化に対する親（保育者）の適応の努力の結果など、一連の流れの中で、双方がいかに変化していくかにあるということが分かる。つまりこの時期に起こりうる様々な状況を、その都度、どう解釈して、どう対応するかによってこの時期の意味づけも変わってくる可能性があると言えるのである。

ちなみに筆者自身は「イヤイヤ期」という通称があまり好きではない。なぜならこの呼び方は、親（大人）側からこの時期の子どもを見たとき、親（大人）を困らせる「聞き分けのない悪い子」イメージが前面に出ているように感じるからである。その背景にある、子ども側の「自我の芽生え」等のプラスの側面は、背景に隠れ見えにくくなるように感じられる。というわけで、筆者自身はこの通称を「イヤ」な呼び方だと感じている。

筆者は本学の学生ならどう考えるか知りたかった。将来、保育者を目指している彼女らは、おそらくこの時期の園児と関わる機会も多くあるであろう。また「イヤイヤ期」にある子どもの問題で悩んでいる保護者と関わることもあるかもしれない。そんな時、自分自身がこの時期をどう意味づけているかは、彼女らが、この年齢の子どもや、その保護者と関わる際の、自身のふるまい方に、少なからず影響を及ぼすのではないだろうか。自らの考え方は、知らず知

らず、その関連の行動のあり方に反映されるものである。

そこで、この記事が掲載された2018年の後期の授業で、まずはグループワークのテーマとして取り上げてみた。学生たちはこのテーマに大きな関心を示し、熱心に意見を出し合い、話し合いも盛り上がりを見せた。しかしこの授業では、グループの代表者にグループとしての意見を発表するように教示したため、授業後の感想からも、個人としてはグループ全体の決定と異なる意見の学生もいたと思われた。

そこで別途時間を設け、再度同じテーマで、個人の意見を自由記述形式で記述してもらった。本論では、その内容を詳細に見ていくことで、保育者を目指すものとしての、本学の学生の、基本的な構えについて探ったものである。

2. 方法

(1) 調査対象者

2018年度後期に『教育心理学』を受講していた女子短期大学2回生のうち、白紙回答などを除き、有効なデータが得られた225名

(2) 調査時期

授業時間の一部を用いて調査を実施した

(3) 調査内容

通称「イヤイヤ期」という言葉を、別の名称で呼び換えるとしたら、どんな言葉で呼び換えたいか、またそう考える理由も明記せよ（このままでよいという回答も可）。回答は自由記述形式。

(4) 倫理的配慮

なお調査対象者には、インフォームド・コンセントを行い、本研究への協力に同意したもの

を調査対象者とした。回答は任意であること、回答の拒否や中断は可能であり、そのことによる不利益は生じないこと、呼び換え理由の一部をデータとして使用することがあるが、回答者個人を特定しないものであること、教育・研究の目的以外には使用しないことを口頭で説明し、了承を得た。

3. 結果

前述の朝日新聞の調査では、485人のデータのうち、1位が「めばえ期」(64人)、2位が「自分で期」(44人)、3位が「やるやる期」(41人)であったが、上位3位までを見る限り、すべて2桁の数字となっていた。

しかし本学の今回の調査では、1位が「めばえ期」の11人で最大数であり、225名の意見は様々なに分かれることになった(表現は微妙に異なるが内容的には似たものも多く見られた)。

まず単純集計の結果を上位から順次提示し、そう呼び換えたい理由の主なものを示していく。

・1位:「めばえ(芽生え)期」 11名

「芽生えてきた期」も含めると、12名がこの呼び換えが良いと答えた。その理由として共通するのは、「イヤ」という表現も含めて、自分の意思を伝えたい、表現したい、主張したいという気持ちが芽生えてきた証だからというものである。

例えば「自我の芽生えにより、挑戦してみたい、自分でしてみたい等のやりたい気持ちや、今はそのことをやりたくないという気持ちを自己主張として相手に伝えられるようになった時期だと思うから」「今までは、泣いたり叫ぶことしかできなかった子どもが「イヤ」という表現を使って、自分の欲求を通そうとするようになっ

た成長の証だから」「感情を表に出したり、自分の気持ちを体を使って表現するということは、成長の第一歩だから」「子どもが成長する中で必要なことだと考えると、めばえ期というのは子どもがのびのび成長していく感じがして悪いイメージにはならないと思ったから」「イヤイヤ期だとネガティブなイメージが強くあるが、いやと言えるようになった、つまり自分の意思を主張したいという気持ちが芽生えてきたという風にとるべきだと思ったから」などがあつた。

・2位:「やるやる期」 8名

「やる期(2)」「やる気あふれる小さな王様期」「やるぞ期」なども似た表現になる。

ここでの理由として特徴的なのは、何でも自分でやってみたいという意欲にあふれている一方で、やりたいけど今はダメなどの感情コントロールは困難な状態をあらわしている状態だからというものが多かった。「やってみたい期(3)」「やってみよう期(2)」「やりたい期」「やりたい放題期」「やりたくない期」なども似た表現になる。

呼び換えの具体的な理由として「子どもが「イヤ」と言っているのは、大人の力を借りずに自分の力で何かをしたいという「やるぞ」という気持ちがあるからだと思うから」「自分でやりたいけどうまくできない、でも大人にはしてほしいくないという葛藤の中で子どもは成長していくから」「自我が芽生え、何でも自分で決めたい、自分でやりたいという気持ちが強くなってきているため、周りの人が言ったことが嫌になり、かんしゃくを起こしてしまうと思うので」「やってみたいという意欲にあふれている一方で、やりたいけど今はダメなどの気持ちを理性でコントロールすることは困難。しかしそれはやりたいという意思があるからこそだから」などがあつ

た。

・3位：「自分でやりたい期」7名

「自分」を含む表現は他にも「自分でできるもん期(4)」「自分で(ジブンデ)期(4)」「自分でしたい期(2)」「自分でやる期(2)」「自分でしたいしたい期」「自分でする期」「自分でやってみる期」「自分期」「自分自分期」「自分で頑張りたい期」「自分でやれるもん期」「自分との葛藤期」など多岐に渡った。

この時期の子どもの口調の特徴にも「自分」「自分で」はあるが、子どもが「イヤ」という理由の背景には、この「自分でやってみたい」があるので、そのことをどう受け止めるかがこの時代の評価を左右するという理由が多い。

例えば「反抗期と思えるような言動を繰り返し、相手の反応を見ることで少しずつ学んでいく時期だから」「自分でやりたいという思いや、今はそれをやりたくないという思いから反抗するようになるが、感情コントロールの方法や、他人への思いやりを身につけていく大事な時期でもあるから」「この時期の子どもはなんでも自分でやってみたいという気持ちを強く持っている。その裏返して「イヤイヤ」と言ってしまうことがある。その気持ちを受け止め子どもの成長につなげていく時期だから」などがあった。

・4位：「したいしたい期」・「すくすく期」・「ワクワク期」が同数で6名

まず「したいしたい期」では「自分」がキーワードだったところと同じく、いやという言葉は、したいという気持ちの裏返しという意見。

例えば「イヤイヤの背後には自分でしたいという気持ちがあると思ったから」「子どもが嫌というのは、自分でしたいからであり、保護者や保育者、大人にやってもらうのではなく、自分でしたいという自我が芽生えるから」「イヤ」と

子どもが言うってしまう背景には、出来ることが少し増えたことで、自分で何でもしたいという気持ちが出てくるからと考えるから」などがあった。

「すくすく期」の例としては「自分でやりたいという気持ちが大きくある時期で、子どもが自分の思いを持ち、自分らしくすくすく育つために必要な時期だから」「いろんなものに興味を持ったり、自我が芽生えたりと、心の成長、子どもの成長が見られるものなので」「この時期は保護者にとっては何もかもイヤイヤと言われてしまい、とても大変な時期かもしれない。でもイヤイヤがいえることはすくすく成長している証だから」などがあった。この表現も呼び換え理由も、この時期の在り方を望ましいものとしてとらえているのが分かる。

「ワクワク期」での「ワクワク」という言葉は、子どもにとっても大人(保護者や保育者等)にとっても当てはまると考えているようである。

例えば「ポジティブに捉えれば、子ども自身の自我が芽生え、それを主張できるようになった、子どもが何に対してもワクワクした好奇心を持ち、成長している証だから」「この時期の子どもは「自分でやりたい!」という気持ちが大きくなり、新しいことにたくさん挑戦していくことでワクワクした気持ちになると考えたから」は子ども側の例、「子どもは今までは大人の助けなしでは何もできなかったが、2歳ごろになり自分でやってみたいという自我の芽生えの証で、子どものこれからの成長にワクワクするから」「この表現ならプラスイメージになるので、保護者の方も嫌がったり躊躇なしに言葉に出して言えると思ったから」は大人がワクワクする例と言える。

・7位:「のびのび期」5名

「のびのび自由期」や「すくすく期」なども似た表現になるかもしれない。ここでの呼び換え理由は、ほぼ全員がこの時期をポジティブなものとして捉えたいと述べている。

例えば「この時期にこそ、子どもが人としての基礎を形成していき、いろいろなことに挑戦し、体験する大切な時期だからこそ、前向きな表現で表した」「イヤイヤ」というと子どもの否定的な姿が想像されてしまうが、「のびのび」だと自分の欲求を伝えようと自己主張を全身で表している姿が想像できるから」「この時期にこそ、子どもが人としての基盤を形成していき、いろいろなことに挑戦し、体験する大切な時期だからこそ、前向きな表現で表したい」などである。

以下、4名が呼び換え名として挙げたのが、前述の「自分でできるもん期」「自分で(ジブンデ)期」と「喜怒哀楽期」の3例。

3名が呼び換え名として挙げたのが「大人の階段のぼる期」「がんばる期」「自我の芽生え期」「チャレンジ期」「挑戦期」「ファイト期」「やってみたい期」の7例。

2名が呼び換え名として挙げたのが「あのね期」「いっちょまえ期」「キラキラ期」、前述の「自分でしたい期」「自分でやる期」「成長を喜ぼうよ期」「前む期」「なんでも自分でやりたい期」「なんでもやりたい期」「初めの一歩期」「はちゃめちゃ期」「やってみよう期」「わけわからん期」の13例であった。

全体の90%以上が、この時期の呼び名をポジティブな表現に変えることにより、子どもの成

長過程において、ポジティブなものとして捉え、大変さに対しても、前向きに向き合っていこうとする表現が多かった。

しかし少数派ではあるが、中には「お母さんもいっばい悩む期」や「お母さんもいやいや期」「困った期」「ちびころモンスター」「泣きたい期」(大人も子どもも?)など、この時期の子どもの反応に振り回される保護者や保育者の思いを言葉にしたもの、この時期のネガティブな側面を表現した意見もあった。

4. 考察

本学のデータを分析する前に、この論文の出发点となった2018年5月12日付の朝日新聞の記事の内容の詳細を振り返ってみたい。

この記事の中ではまず、「ママ(パパ)あのね期」はどうでしょうと提案する女性の内容が掲載されている。この女性は、夫が仕事の関係で帰宅時間が遅く、まさにワンオペ育児で頑張っていた。24時間育児するのは非常に大変だが、その大変さは誰にもわかってもらえない(と彼女は感じている)。世間は「子どもとずっといられるのは幸せでしょう」と彼女の思いには全く気付いてくれない。

その時期に始まった「イヤイヤ期」。まさに追い詰められ、正直お手上げ状態だったかもしれない彼女だが、ある日、寝付かずに泣きわめく我が子に「どうして寝たくないの?」と聞いてみると、「あのね」と切り出した後、たどたどしい言葉で一生懸命その理由を語ってくれた。その出来事をきっかけとして、彼女は「(わが子はただ)話を聴いてほしかったのだ」と気付く。当時ははっとした気持ちを表現したい。そこから彼女は思いを伝える前の「あのね期」を提案した。

また別の事例では、2歳の次女の様子を、母親

は「わけわからん期」、長女は「ハチャメチャ期」、父親は、次女の行動をポジティブに捉えたいということで「わくわく期」と名付けた。同じ家族でも、その立ち位置や捉え方で、いろいろな表現が可能となるのが分かる。

また2歳半の孫がいる60代の女性は「のびのび期」を提案した。自身の子育て中と比べ、現代社会では、子どもへの周囲の視線が冷たいことが気になっていた。「子どもはのびやかに育てほしい」との思いから選ばれた呼び名である。

「呼び方を変える必要がない」という意見の中には、この「イヤイヤ期」という言葉が必ずしもマイナスイメージではなく、「イヤイヤ期だからね!」という分かりやすい表現で、保護者と保育者が共感しあい、笑いあえる環境もあるのではないかという意見であった。

本学の学生が呼び換えたいものとして選んだ言葉を上位から並べてみると、「めばえ期」「やるやる期」「自分でやりたい期」「したいしたい期」「すくすく期」「ワクワク期」「のびのび期」となる。

「めばえ期」や「すくすく期」「のびのび期」などは、大人側から見たとき、子どもがあらまの姿を表現できるようになってきたことを「成長の証」として喜ぶ大人の姿が垣間見える表現である。自己表現できることをプラスに捉えている表現と言えるだろう。

一方、「やるやる期」「自分でやりたい期」「したいしたい期」などは、自我が芽生え、何でも自分でやってみたいという、子どものやる気・意欲などをポジティブな表現で表したものとなっている。

「イヤ」という表現も捉え方によっては、大人の力を借りずに自分の力で何かをしたいというやる気の表れとも言えるのである。

この時期の子どもの口癖に「自分」「自分で

があるが、まだ完全に自分の力のみでは出来ないことも多いにもかかわらず、それでも「自分」でしたい。でもうまく出来ない。今はそれをやりたくない。しかし上手な感情コントロールは出来ない。その結果、自分でやってみたい気持ちの裏返しで「イヤイヤ」言ってしまうというわけである。

坂上(2006)⁴⁾では2歳児の養育者(保育者・母親)の観点から、母子の共変化過程に関して4つの研究を行っている。

1つ目の研究では、子どもの意図的な反抗や強い自己主張が現れるとされる1歳代後半から2歳代にかけて、母親の対応が子どもの行動の変化に伴いどのように変化していくのかを縦断的観察によって探索的に検討している。

2つ目の研究では質問紙調査による検討から子どもの反抗・自己主張に対する母親の対応の横断的变化とその背景要因を明らかにした。

その結果、子どもの発達的变化に促される形で母親が、母・子双方の意図に焦点化した、相互調整的、互恵的なやり取りを育てる対応を子どもの反抗・自己主張の時期に身につけていくことが示唆された。

この2つの研究の結果に共通して示されたことは、この時期の経験を通じて、母親の対応に柔軟性が増し、子どもの理解者としての役割とソーシャライザーとしての役割という、親として取るべき2つの役割の分化と統合が進むという母親の変化過程である。

子どもの反抗期の経験を、母親の視点から共変化過程として明示したことは、大変意義のあることであると寒河江・佐久間(2016)²⁾は結論付けている。

3つ目の研究は質問紙調査による子どもの反抗・自己主張に対する母親の受け止め方である。結果としては、反抗期の始まりに際して255人

中、約51%の母親が肯定的な感情や考えを持ったと回答し、255人中、約46%の母親は苛立ちや困惑と言った否定的感情を持ったと回答した。子どもから初めて強い反抗や自己主張を受けるといった経験は、特に否定的育児感情を持つ母親には影響している可能性があると考えられるだろう。

4つ目の研究では、子どもの反抗・自己主張に対する母親の適応過程について、面接調査を行っている。その結果、初めて親になった人にとってこの時期が、子どもとの大きな対立を経験する(おそらく)初めての機会にあたり、子どもの変化に適応していくための手法を作り上げていくことが必要になることを示唆している。

しかしこの時期の子どもの変化、子どもとの関係性の変化として「意思疎通、相互理解が可能になった」「子どもと一緒にいるのが以前より楽しくなった」という例もあり、母親がそれまでとは異なる形で、子どもとの心的な一体感やつながりを持ちうるようになったことを明らかにしている。

一方、2歳児という年齢はどういう年齢といえるのだろうか。木下(2011)⁵⁾は自己の発達について、2歳児前半は表象レベルでの自我視点の混乱の時期であり、2歳児の後半になると、内なる他者を媒介にした自我理解の時期になると述べている。自己制御や情動調性プロセスの過程でも(個人差はあると思われるが)不快な感情を抱いたときに、単に否定的行動を示すだけでなく、気晴らし行動なども見られるようになることが分かっている。

2歳児という段階は、不快な感情を単に主張していた段階から、相手の気持ちもくみ取りながら、自分の気持ちも快感情へと導くための練習をしている時期。自分の思いを自分なりに調整

していく過程の時期ともいえるのかもしれない。

永遠に続くかと思える「イヤイヤ期」もいつしかは終わりを迎える。「魔の2歳児」「悪魔の3歳児」「天使の4歳児」という言葉があるように、成長の過程で子どもは徐々に落ち着いてくる。また前述のように、子どもの成長に対応するように、養育者(保育者・母親)も適応能力を身につけていくのである。

彼女らが職場で実際に「イヤイヤ期」の子どもと関わる時、またストレスで追い詰められている母親を前にしたとき、今回の調査で答えたように、子どものポジティブな側面からのみを見ようとする思いは、時に崩れてしまうかもしれない。しかし、ただ意味もなく「イヤイヤ」と言っているわけではないこと、その背景にある子どもの成長を再確認しようとする基本的な思いは、今後に生かされるものとなるであろう。

鳥丸(2016)⁶⁾では、入学直後とすべての実習が終わった1年半後の2回に渡って、学生が描く「保育者」イメージを調査したが、その結果からも、実習経験後の方が、園児や保護者の思いに寄り添える保育者像を描くことが分かった。

保育の現場は毎日が新しい経験の繰り返しである。時に思い通りにならないことも起こりうるかもしれないが、子どもの行動の背景にある(特に困った行動に関して)思いをくみ取り、見通しを持って、それらに対応していける保育者を目指すことを期待したい。

参考文献

- 1) 坂上裕子(2003)歩行開始期における、子どもの反抗・自己主張に対する母親の対応：子どもの月齢、出生順位、発達の変化との関連 帝京大学 心理学紀要 No.7. 59-78
- 2) 寒河江芳江・佐久間路子(2016)2歳児における他

- 者とのかわりに関する研究の動向 白梅学園大学・短期大学 教育・福祉研究センター研究年報 No.21 49-60
- 3) 氏家達夫 (1995) 乳幼児と親の発達. 麻生武・内田伸子 (編) 講座 生涯発達心理学 第2巻 人生への旅立ち 胎児・乳児・幼児前期 pp.129-162 金子書房
- 4) 坂上裕子 (2005) 葛藤場面における一母子のやり取りの縦断的变化-観察による検討-(研究1). 坂上裕子著 反抗期における母親の発達-歩行開始期の母子の鏡変化過程 pp68-116 風間書房
- 5) 木下孝司 (2011) ゆれ動く2歳児の心-自分なりの思いが宿る頃-, 木下孝司・加用文男・加藤義信編著『子どもの心的世界の揺らぎと発達』 pp37-63 ミネルヴァ書房
- 6) 鳥丸佐知子 (2016) 保育士養成関連授業は学生の何を変えたのか - 「保育者」イメージを中心に- 京都文教短期大学『研究紀要』第54集 41-46